

## 表現の自由

第4回九条美術展の最終日(1月17日)に上野の東京都美術館まで出かけました。

上野は長年住んだ場所ですので、いつも懐かしさで一杯になります。高校生時代、美術の課題として、国立博物館、科学博物館、都美術館の建物を描きに日参しました。当時は建物がよく見えていましたが、現在は木が茂りすぎて隠れてしまいました。西洋美術館のロダンの彫刻を眺めるのも楽しみでした。上野は汚くて怖いというイメージが当時はありました。それゆえ、「野上のチャン姐だヨ」と山の手出身の友達に自己紹介したこともありました。なんというはしたない言葉づかいでしょう！品のいいクラスメートは、ビビって、「チャキチャキの江戸っ子なのね」と私を褒めて(?)くれました。ふざけて言ったのに、怯えたり、真に受けたり、軽蔑したり、いろいろの反応があって、楽しみました。昔話とはかくとして、人はほんの少しの情報から、なんとか分かってろうと思って考えを巡らせますが、誤解、偏見、先入観に支配され、本当に理解することが難しいことが多いのです。



「疾走」 浅野輝一

最終日という事で、不思議なパフォーマンスがありました。赤い着物姿のダンサーが「九」、「条」、「九」、「鳥」と書かれた紙を一枚ずつ手に取って、踊りながら、フロアに並べていきます。静かな音楽が流れます。一枚一枚の紙は音楽が終わった時に、フロアに数字の9の形に並べられていて、最後に「九」と「鳥」を一緒に掲げ、「鳩」という書にまとめました。九条で平和の

シンボル鳩を作り上げるダンスでした。書家が最後に観客からのリクエストで「不戦」の文字を書かれました。表現の形は空間、衣装、踊り、音楽、文字など本当に多岐にわたってなされるものだと感じます。とても楽しかったのですが、ハッキリと意味が分かるものはやはり文字でしょう。

最近フランスの風刺画がイスラム過激派のテロを誘発しました。表現の自由を謳って、フランスは大団結しています。多勢に無勢の中で風刺を受ければ、それはいじめと取られかねません。「表現の自由」を主張するのは権力側へ突きつける時ではないでしょうか。イスラム教徒のマララさんが1本の鉛筆、1冊の本を求めた姿が忘れられません。貧しい中で懸命に生きようとしておられます。一人ひとり、互いに向かい合って、違いを受け入れあって、一緒に生きて行かなければ、いくら上手に表現しても見てくれる相手がいなくなるじゃありませんか。

10年前に「九条美術の会」が作られ、賛同するアーティストによる美術展があることを新聞で知って、勇んで出かけました。たくさんの絵画、彫刻、クラフトが展示されていました。「憲法九条と平和への願いを込めて」多くの作家がこのように表現する場を得て、訴える様子は圧巻でした。戦争の記憶、戦争の予感、死の悲しみ、平和の風景、命を慈しむ姿、生きる姿、など、様々です。パンフレットをいただき、「現代社会に生きる市井の人々の物悲しい日々の営み」を描く画家の絵(左)を見ました。この絵は、津波で流された人々が水底で、どこかへ向かっているような感じを受けました。

